〈解答〉

1　1　（主語）おばあさんは（述語）言ったのだ（両解）

2　断

3　キャベツ畑のむこうの青屋根

4　ア

5　紙のカップ

配点　各2点　10点満点

〈解説〉

1

1　主語と述語を求められた場合は、述語から探すのが鉄則。日本語の述語は、文の最後にあるのが一般的であり、見つけやすいからである。よって、波線ⓐの文の述語は「言ったのだ」であることがわかる。後は、誰が「言った」のかを、文中から探すと、「おばあさん」が「言った」のだとわかるので、これが主語となる。一文節で抜き出すという条件であるため、「おばあさんは」と書くこと。

2　「何度もそう思ったが、その勇気はなかった」というのは、「ぐずぐずして物事の決断ができずにいる」ということであり、それを表す四字熟語は「優柔不断」である。「不断」には、「とだえずに、いつまでも続くこと」という意味のほかに、「物事を決定することができない」「決断力がない」という意味もある。

3　傍線①の十七～十八行後に「キャベツ畑のむこうの青屋根といえば、子供たちにとって、おばけ屋敷もおなじだった」とあるのに注目する。「養老院」は、「キャベツ畑のむこう」にある「青屋根」をいただいた建物であり、「時夫」をはじめとした子どもたちは、そこを「鬼ばばあ」が住んでいる「おばけ屋敷」のようなものだと認識していたのである。

4　［②］の直前に「しっかりした足どり」とあることから、「軽快に勢いよく動いてゆくさま」を表す副詞、ア「つかつか」がふさわしいとわかる。

5　本文の後半で、時夫が、トキさんからアイスクリームを勧められる場面があるが、そのアイスクリームについて、「かちかちにかたまって、冷蔵庫のにおいがついていた」と表現されていることに注目する。トキさんが、時夫が来てくれたときのために買っておいた「バニラアイス」は、時夫がなかなか来てくれず、そのまま冷蔵庫に入れ放しにされていたために、「かちかちにかたまって、冷蔵庫のにおいがついていた」のである。